

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.48

帆樯成林

—はんしょうせいりん—

「帆樯成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

CONTENTS

特集1	「よろい研究会」と博物館活動	P.2~3
特集2	企画展「地図と古写真でみる新潟の文明開化」	P.4
歴史さんぽ	清五郎開拓八人衆	P.5
おすすめの冊子	和船建造技術を後世に伝える会調査報告書 とやまの海と船	P.5
研究notes(第35回)	収蔵品展「歴史で見る新潟市とスポーツ」	P.6
館長日記	抜け荷発覚	P.7
収蔵資料紹介	「仁太郎小屋」図	P.7
博物館 あちろちろ	旧第四銀行住吉町支店の大理石	P.8

印刷／株式会社ウエッザップ

帆樯成林「はんしょうせいりん」vol.48号
編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
発行日 令和元年12月18日

【たいけんのひろばプログラム】楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
1月4日(土)・5日(日) 14:00~15:00	お正月あそび・自分の双六をつくって遊ぼう	お正月ならではのあそび、双六。どうせなら、自分の双六をつくってみましょう。他にもお正月に良く遊ぶ、遊び道具を用意しています。	どなたでも申し込み不要・無料
1月11日(土) 14:00~15:00	企画展関連プログラム 飛び出す写真をつくってみよう	写真や絵を何枚も重ねて立体的にする「シャドーアート」の手法で、新潟のむかしの風景を、飛び出す写真にして楽しみます。	どなたでも申し込み不要・無料・材料がなくなり次第終了
1月12日(日) 14:00~15:00	古町いまむかしカルタ 完成披露カルタ大会!	この夏、みなとぴあでは有志の小学生とともに、古町地区をテーマにしたカルタづくりワークショップを実施してきました。この度、カルタが完成したので、披露を兼ねて、カルタ大会を開催します! こどももおとなも集まれ!	どなたでも申し込み不要・無料
1月18日(土) 10:00~12:00	みなとぴあ わら部	ワラゾウリをみんなで教えあいながらつくります。	大人向けの活動・部員が対象
1月18日(土) 14:00~15:30	みなとぴあ もめん部	博物館にある資料を使いながら、布生産にまつわる手仕事を体験します。	大人向けの活動・部員が対象

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申込み締切日は、当館までお問い合わせください。

現在開催中の企画展

「地図と古写真でみる新潟の文明開化」展

明治元年の新潟開港は、それまで商業中心だった港町新潟を、新潟県政をも担う町へとその姿を変えました。開港後の近代化の中で町がどのように移り変わってきたのか、その様子を地図と古写真によって視覚的にたどります。

会期 2019年12月21日(土)~2020年2月2日(日)

休館日 毎週月曜日(1月13日は開館)、
12月28日~2020年1月3日、1月14日

観覧料 一般: 300円(団体 240円) 主催 新潟市歴史博物館
高校生・大学生: 200円(団体 160円)
小学生・中学生: 100円(団体 80円)

関連イベント	■展示解説会 日時: 2019年12月22日、 2020年1月5日、19日、 2月2日 各回14時~14時30分(30分程度) 会場: 本館1階企画展示室 申し込み: 不要	■ミニ講座「新潟文明開化小話」 第1幕「明治地図づくり小史」/第2幕「新潟人力車小史」 日時: 2020年2月1日(土) 13時30分~14時30分 会場: 本館2階セミナー室 講師: 鈴木彩也花・安宅俊介(当館学芸員) 申し込み: 不要(先着80名) 料金: 100円(資料代)
	■記念講演会「文明開化と人々の暮らし」 日時: 2020年1月25日(土) 13時30分~15時 会場: 本館2階セミナー室 講師: 伊東祐之(当館館長) 申し込み: 氏名・電話番号・住所・講演名を明記の上、 電子メールか往復はがきで1月10日(日)まで まで申し込みください (定員80名、応募多数の場合は抽選)。 料金: 100円(資料代)	■(こども向け)体験プログラム 「飛び出す写真をつくってみよう」 日時: 2020年1月11日(土) 14時~15時 場所: 本館1階たいけんのひろば 申し込み: 不要(材料がなくなり次第終了) 料金: 無料
	お申込みの場合は、メールかFAXでイベント名・ 氏名・住所・電話番号を明記し、博物館まで	

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

【時間】 13:30~15:00
【会場】 本館2階セミナー室
【申込】 不要(当日受付・定員80人程度)
【資料代】 100円

- ◆1月の講座:1月26日(日)
「川村修就文書を読む「川村帰元 将軍上洛始末」」
講師: 若崎敦朗
- ◆2月の講座:2月23日(日)
「新発田藩領の大庄屋制 一地域運営を中心に」
講師: 安宅俊介

次回企画展

「収蔵品・新収蔵品」展

資料の収集・保存は博物館の重要な事業です。今回の収蔵品展では、来年夏にオリンピックが開催されることにちなみ、スポーツに関する収蔵資料から新潟とスポーツの歴史について紹介します。新収蔵品展では、当該年度に新たに収集した資料を紹介いたします。

【会期】 2020年2月15日(土)~2020年3月22日(日)
【休館日】 毎週月曜日(2月24日は開館)、2月25日(火)

お知らせ

- 2019年12月28日(土)から2020年1月3日(金)まで休館します。
- 2019年2月3日(月)から2月10日(月)まで施設整備のため休館します。
- 新潟開港150周年記念資料集「明治のいがた 一地図・写真」好評販売中!

編集後記 今回は、ボランティアさんの自主活動であるよろい研究会について特集しました。先日、研究会では、新作よろいの完成披露会を行いました。これを機に、新しく参加して下さる方も増えたそうです。ボランティアさんの中には、この他にも研究会を発足したいという声があります。今後、どのような自主活動が始まるか楽しみである一方で、私たち職員もボランティアさんが活動しやすい場所を提供していきたいと思っております。(鈴木)

お問い合わせ・申込みは博物館まで…

新潟市歴史博物館 みなとぴあ
住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130
E-mail: museum@nchm.jp http://www.nchm.jp
【休館日】 毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)
【開館時間】 (4-9月)9:30~18:00 / (10-3月)9:30~17:00

2019. 6. 25 現在

みなとぴあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、開港150周年を迎えた新潟の街をみんなで盛り上げていこう!という事業です。

「みなとぴあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。

NST 日和山五合目 北陸ガス NSGグループ humming 本間組 田中屋本店 堀川 新潟「いけうち」



「よろい研究会」と博物館活動

藍野 かおり

みなとびあの「たいけんのひろば」の特色の一つは、週末ごとに行われるたいけんプログラムです。たいけんプログラムは、歴史・文化・人々のくらし・博物館の活動など、当館の設置目的に関わる分野からテーマを設定し、子どもから大人まで、参加者が博物館ならではの体験活動を通して学びを得る事を目標に企画運営しています。これに深く関わっているのが「たいけんのひろばボランティア」のスタッフの皆さんです。たいけんプログラム実施時の参加者サポートをはじめ、菓子箱を使って簡易な織り器をつくり、織りの仕組みを学びながら、さきおりコースターを作る「布を織ってみよう」や、ワラからパイプを抽出し、紙づくりを体験する「わら紙づくり」など、ボランティアスタッフが企画運営するプログラムで活躍しています。また、自然体験や手芸など、それぞれの得意分野をプログラム化し、実施するなど、個々の強みを活かしています。

また、たいけんのひろばでのボランティアスタッフの活動で特徴的なのが、「●●研究会」あるいは「●●プロジェクト」と銘打った、ボランティア有志の活動です。

これは、具体的なたいけんプログラムの企画にむけて、その内容に興味を持った有志が集まり、プログラムの実施に向けて練り上げていく、いわば、プログラムの種をまき、みんなで育てる活動です。漠然とたいけんのひろばという場でやってみたいことがある人、アイデアがある人の想いを、皆で支えて形にしていく、ということをしつつではあります。二〇〇四年のボランティア活動開始当初から行っています。

これまで、「おりひめプロジェクト」「むかしのあそび研究会」「むかしのおもちゃ研究会」などを実施してきました。それぞれの研究会で、記録や試作などを通して、プログラムだけでなく、たいけんのひろばの場としての活動に還元するような動きが生まれてきました。次の活動の種が生まれる仕組みは、博物館活動にとつての財産ともいえるでしょう。

「よろい研究会」の発足

みなとびあたいけんプログラムの一つに「カブトを折ってみよう」というものがあります。これは、大きな紙を

使った折り紙で人がかぶれるサイズの兜をつくる、というものです。折り方が少し複雑ですが、出来上がった形が華やかなので、参加者には好評を得ています。兜ということで、端午の節句にちなみ、五月上旬の定番プログラムになっています。

このプログラムをサポートしていたボランティアスタッフから、「兜を紙で折っておしまいではなくて、最近のコスプレの流行も踏まえ、鎧を身に付けて、記念撮影してもらおう」というコミが期待できないだろうか」という提案がありました。これがきっかけで、鎧をつくるプロジェクト、「よろい研究会」が発足しました。

とはいえ、甲冑は節句には飾るけれど、鎧のことはよく知らない、という者たちばかり。そうした不安をかかえながら、研究会はスタートしたのでした。どんな鎧にするのか、材料はどうするのか、一から皆で考えることから始まりました。研究会として決めた方針は、①経費削減のため、身近な材料をリサイクルして作る ②「カブトを折ってみよう」に参加してくれる子どもにも合わせた大きさのものを作る ③簡単に着脱できるようにする ④作る過程



写真1 初代よろいを参加者に着用してもらっている様子

部を保護する部分をどのように取り付けるかでした。威しと呼ばれる装飾をかねた紐での取り付けは、長さを一定にし、バランスよく配置しなければなりません。そのためどうするか、みんなでアイデアを出し、何度もナイロン紐で実験・練習を繰り返して完成イメージを共有しながら、製作を進めました。ようやく出来上がった鎧は、実用的な面から、肩の部分に面ファスナーを張り付け、着脱を簡易にしました(写真①)。

次なるステップと開港一五〇年

初代の鎧をつくり、「カブトを折ってみよう」のプログラムが実施されたあと、今後のよろい研究会の方向性が話し合われました。子ども向けのプログラムで使用するものだから多少違うところがあったとしても実用性を重視するべきという考えと、歴史博物館として、より実物に近いレプリカづくりを目指すべきという考えが出されました。どちらも一理あるものです。話し合いの中で、「今回は子どものサイズのものを作ったけれども、本来、鎧は大人サイズで作られていたものであり、本物により近いものを作ろうとすることで、いろいろと見えてくることがあるのではないか」という意見が出されました。また、つくるのであれば、有名な武将の鎧のレプリカづくりでは、みなとび

あならではの活動といえないのでは、という疑問や、さらに、二〇一九年に開港一五〇年を迎えることから、これをバックアップする活動にしたい、というアイデアが出されました。こういったことから、収蔵資料である川村家伝来の「紺糸素懸威腹巻」のレプリカを、身近な材料を用いて作ろうというチャレンジが始まりました。

レプリカづくりの第一歩として、まず大人サイズの鎧を作ることになりました。製作の過程で、鎧の素材感をどのような材料で再現するかが検討されました。黒いビニールテープを表面に張り付けてつや感を再現したり、塗料や仕上げ剤も何種類か試しながら、鎧を一体仕上げました。

これと並行して、実物の実測、撮影、観察を行いました。鎧の各部をさまざまな角度から撮影し、製作時の参考資料としました(写真②)。



写真2 紺糸素懸威腹巻 実測の様子

このような過程を経て、紺糸素懸威腹巻のレプリカよろいづくりが進行しました。実測の結果をもとに、段ボールで土台を作り、小札風に見せるために、牛乳パックを切って重ね合わせ、障子紙を張りつけました。漆を塗った皮のような質感になるよう、耐水性のある絵の具を塗った後、薄めた木工ボンドでつや出しをしたり、立体的に仕上げるために霧吹きで湿らせながら丸曲した形にするなど工夫が凝らされました。

さらに、鎧の完成後、兜もあった方がよいとのことで、不用品のヘルメットを土台にして兜が製作されたのでした。研究会が発足して、足掛け五年、ボランティアスタッフがまいた種が、大きな成果となりました(写真③)。

今後の展開

よろい研究会では、身近な材料での鎧づくりの工夫をしてきました。集大成となった、紺糸素懸威腹巻レプリカ

で武器としての目的や構造も理解する、の四点でした。この方針を受け、段ボール製の二枚胴の鎧をつくることになりました。

鎧の製作が始まる

他館の展覧会図録や、甲冑研究の入門書、インターネット上での手作り甲冑の作り方などを参考にしながら、設計図を作り、試行錯誤を繰り返しながら、段ボールを裁断し、ポストカードで着色、ニスで硬化・つや出しという流れで製作しました。ここでネットとなったのは、草摺と呼ばれる大腿

づくりをはじめ、歴代の鎧づくりを通して、身近な材料で鎧を作るノウハウが蓄積されています。これを活かして、来年の五月に向け、あと二〜三体、子ども用やデザインの違いを工夫して、プログラム実施の際にお客さんに楽しんでもらいたい、という意見が出ました。これを受け、よろい研究会は発展的に解消し、今度は「よろい工房」と銘打って、研究会のメンバーを中心に、より多くのボランティアスタッフに参加してもらいながら、モノづくりにシフトした活動を行おうとしています。

この、よろい工房での活動を通して、次の活動のタネが生まれるかもしれません。また、研究会で行ってきたこれまでの試行錯誤や、よろいについて調べてきたことなどをモチーフにしたたいけんプログラムやたいけんのひろばでの展示なども検討できそうです。

次はどんなアイデアが形になっていくのか、近い将来、また皆さんにご紹介できればと思います。

(あいの かおり 学芸員)



写真3 完成した「紺糸素懸威腹巻」レプリカ

年号が「明治」に変わり、都も京都から東京へと遷され、天皇のもとで中央集権的な国家政策が行われていきました。また、欧米諸国の制度を模範とした政策が展開されるなかで、町や人々のくらしも西洋風に変化していき「文明開化」と呼ばれます。

新潟町の開化を大きく進展させたのは、明治五（一八七二）年に新潟県令に就任した楠本正隆でした。楠本は、開港地として恥ずかしくない町を目指し、町づくりを行いました。

港の周りには、税関や灯台といった港の運営に必要な施設がつけられました。また、町の中心地には、官公庁をはじめ、銀行や郵便局といった金融や通信機能を備えた施設が建てられ、町の周りには学校や病院、公園などが設置されました。これらの建物の多くは、西洋を意識した建築様式でつくられました。

町並みの整備にも力を入れました。明治六年三月より町を三つの等級に分け、そのうち一等地（大川前通・本町通・古町通）と二等地（東堀通・西堀通・南多門町・北多門町・林島・榛島）に建築物の基準を定めます。ま

た、掃除を徹底させるなど、衛生面の強化も行われました。当時の古町を撮影した写真を見ると、屋敷の庇の高さが一定に揃えられ、道路がきれいに整備されていることがわかります。しかし、瓦葺屋根への変更が迫られる中で、石置きの屋根が何軒かみられることから、町並みの整備がすべて完了するには時間がかかった様子もうかがえます（資料①）。

人々のくらしにも西洋文化が取り入れられていきました。洋服を着用する人が見られるようになって、男性の髪型は、明治五年に公布された断髪令によりザンギリ頭に変化していききました。また、当時の写真や絵画資料をみると、洋傘やシルクハットなども



【資料①】写真 明治初期の古町通三番町(当館蔵)

人々の生活に根付いていった様子がわかります（資料②）。明治二十九（一八九六）年に出版された「新潟市商業家明細全図」には、古町などの中心部において洋品を取り扱う店が多く見受けられることから、これらのお店から購入していたのでしょうか。さらに、「イタリア軒」などの西洋料理店も開店し、ここでは牛肉や牛乳などが提供されるようになるなど、食生活にも西洋の食品が取り入れられていきました。

そして、このような文明開化期を経て、新潟の町はさらに変わっていききました。明治十九（一八八六）年、新潟



【資料②】新潟県主催 新潟市十一郡連合共進会会場之図 (明治34年 当館蔵)

と沼垂の間に萬代橋が架けられ、明治三十（一八九七）年には「沼垂停車場」(沼垂駅)が開業し、鉄道が敷設されるなど、陸上交通網が整備されていきました。さらに、工業化にともない、町は広がりを見せました。明治二十年以降、県内で石油採掘が盛んになると、関屋地区には、多くの製油工場が建てられていきました。また、山ノ下から沼垂地区には、日本石油株式会社支店である新潟鉄工所や製油事業に不可欠な硫酸会社が設置されていきました。

以上のように、新潟町は開港以降、これまでとは異なった風景へと変わっていききました。今回の展覧会では、明治から大正期の地図・写真を数多く展示しながら、町の移り変わりを紹介します。地図や写真といったビジュアル資料からは、町の変化をわかりやすく知ることができるとともに、人々のくらしの様子が写實的にみえてきます。文明開化を通して、町や人々のくらしが変化していった様子を、地図や写真を比較しながらご覧いただければと思います。

(すぎき さやか 学芸員)

歴史さんぽ

清五郎開拓八人衆

新潟市中央区清五郎

サッカーチームアルビレックスの本拠、新潟スタジアムの所在地である清五郎。この清五郎という地名はこの地に移住し、開拓した農民の名から付けられたと伝えられています。

伝承によると、寛永17(1640)年、加賀国細坪(石川県加賀市)から8人の農民が船に乗って開拓の新天地を目指してたどりついたのが今の清五郎の土地でした。越後でのくらしをしばらくした後、8人のうちの1人、清五郎が病に倒れて看病の甲斐なく世を去ります。残された仲間たちは彼の名をこの土地につけたのだと言われています。清五郎の名の起りは伝承ではありますが、新発田藩の元禄期の記録には、清五郎を含む長湯村は寛永17年に開かれたという関係しそうな史料があります。

清五郎の伝承に改めて着目したのが大野儀一氏で、昭和60年に『清五郎の今昔』を刊行し、伝承が広く知られるようになりました。

平成17年、「水と土の芸術祭」の一環で、新潟市内の中学生たちがランドアートに挑戦しました。教室からはなれ、テーマをもった作品を協働でつくり、屋外に設置する活動です。生徒たちは、構想を練る学習の中で鳥屋野潟周辺の開拓の歴史をはじめ、特徴的な地形や自然環境、風土などを学びました。その後、作品構想のスケッチを描きました。その中で清五郎を開拓した8人をモデルにしたスケッチを元に、作品をつくることになりました。素材には流木など自然の素材を生かし、教師の協力を得つつ、つくりあげました。そして、平成17年8月、鳥屋野潟のほとりに「清五郎開拓八人衆」が姿を現したのです。

「水と土の芸術祭」終了後も清五郎開拓八人衆は残り、現在も作品づくりに携わった方々や地元清五郎の方々によって守られ、開拓の歴史を今に伝えています。

田嶋 悠佑 (たじま ゆうすけ 学芸員)



中学生のスケッチ (画像提供: 清五郎倶楽部)

おすすめの1冊

和船建造技術を後世に伝える会 調査報告書 とやまの海と船

鉄道や自動車の普及以前、船は交通や輸送、日々の生活において欠かせない存在でした。新潟においても江戸時代に発展した回船や漁船などの海の船、潟や水路で使われた川の船など、多種多様な船が活躍しました。

日本の各地で造られ、使われてきた船を和船と呼びます。本書はお隣の富山県で使われた和船を例に、和船の歴史やそこで培われてきた造船技術、和船の種類や構造をわかりやすく示してくれます。個別の船の紹介では、船の断面構造が示されていて、富山の船が多彩であることや、それぞれの技術的な意味にも気づくことができ、船の見方の理解を深めてくれます。富山の船のオモキ造りやチキリといった技術は、新潟の船にも見られる日本海沿岸の和船の特色で、両者を見比べるおもしろさもあります。

船の見方を知ると、造船の技術の背景にある道具の発達史や経済的な背景も見えてきます。船の文化が果たしてきた役割の大きさを実感できます。

(森 行人 学芸員)



和船建造技術を後世に伝える会 2016年3月

収藏品展「歴史で見る新潟市とスポーツ」

小林 隆幸

ラグビーワールドカップ日本大会では、新潟市出身の稲垣啓太選手の活躍に大いに盛り上がりました。今大会を機にラグビーファンになった方も大勢いることでしょう。

新潟市内には、サッカー、野球のプロスポーツチームがあり、スポーツで盛り上がり楽しむ習慣が根付いていまいよ、日本開催のオリンピックが間近に迫ってきました。否応なしにスポーツで日本が盛り上がることでしょう。

そうしたスポーツ熱に後押しされ、今年度の収藏品展では、スポーツに関する資料を選んで、新潟市とスポーツの歴史を振り返ってみます。

スポーツの始まりと浸透

明治時代を迎え、西洋化とともに進む近代化は、健康な身体づくりにも及びます。先駆けとして学校の学科の中に体操が入られ、教育の場にも体育としてスポーツが定着していきました。明治初期から小学校ではブランコや縄跳びなども奨励され、器具を使用する運動も広まっていたようです。明治二十一年(一八八八)年には新潟区内小学校総合運動会なども催され、運

動の高まりとともに学校では屋内運動場の設置が進められていきました。

四方を水に囲まれた新潟市では水泳の導入も早く、新潟高等小学校では、明治三十二年に古式泳法の「神伝派自然流」を開いた村山正臣を東京から招聘し指導にあたらせました。水泳場は最初、白山堀に設けられました。当館には、寄居浜の海で水泳をする明治末期の写真が残っています。また、水がらみでは明治中期に新潟師範学校や新潟商業学校、少し遅れて新潟中学校で「端艇漕」、いわゆるボート競技が始められました。

大正期には市民にもスポーツが浸透し、競技場などもつくられるようになりました。陸上競技も盛んになり、多くの競技大会が開かれました。戦時中は学生を中心に鍛錬や心身訓練が体育に盛り込まれ、運動会に軍事的な演習なども加わりました。

ここでは、新潟にスポーツが導入され浸透していく明治から昭和戦中期までの状況を、写真を中心に紹介



村山正臣の水泳指導(明治45年)

します。

風間栄一と戦後のスポーツ振興

新潟のスポーツを語るうえで欠かせない人物が風間栄一です。昭和十一(一九三六)年のベルリンオリンピックのレスリング選手であった彼は、戦後、競技者として活躍するいっぽう、後進の指導やレスリングの普及に努めました。

引退後も新潟県のスポーツ振興に尽力するとともに、昭和三十九年のオリンピック東京大会ではレスリング日本代表監督として、五個の金メダルを獲得しました。レスリングの普及と若い選手への指導の精神は、風間杯全国高校選抜レスリング大会として今も引き継がれています。



レスリングポーズの風間栄一(昭和9年)

贈された彼の遺品とともに、その功績をふり返ります。

スポーツの普及と国体・インターハイ

戦後はさらに市民スポーツが盛んになります。スポーツが市民生活に入り

込んでくる中、昭和三十八年には全国高校体育大会(インターハイ)が、昭和三十九年には国民体育大会が新潟で開催されました。その記念品や関係資料が当館にもいくつか収蔵されています。

そうした資料や記念品から、大会に湧いた当時の新潟の様子をみていきます。

国際親善とスポーツ

日韓共同開催になった平成十四(二〇〇二)年のワールドカップは、新潟市と韓国ウルサン市にサッカーを通じた交流をもたらしました。両市をそれぞれ会場に少年チームの親善試合も行われ、平成十八年には交流協定が締結されました。

遡って昭和六十三年には、アジア卓球選手権大会が新潟市で開催されました。多くの市民が開催に加わり大会を盛り上げました。スポーツは新潟と外国の都市との友好や交流にも貢献しています。スポーツを通じたこれまでの国際交流の軌跡を追います。

当展の会期は二月十五日〜三月二十二日まで。観覧無料。お待ちしております。

(こばやし たかゆき 副館長)

抜け荷発覚

天保六(一八三五)年の村松浜の薩摩船難破による唐物抜け荷(中国製品の密貿易)はなぜ発覚したのでしょうか。一度は代官を欺きおこなったのに。従来、逮捕者の一人、加賀屋専助の手記を唯一の史料として事件の経緯だけが述べられてきました。

「北越秘説」は、抜け荷が江戸などの商人の手に渡ったので露顕したと記しますが、具体的ではありません。

先日、国立国会図書館所蔵「天保撰要類集」をデジタルライブラリーで見ていると、この抜け荷摘発に関する記述がありました。石見(現島根県)浜田の八右衛門が、渡航禁止の竹嶋(現鬱陵島)へ渡った事件の史料です。

竹嶋事件は、浜田藩が背後にいたとの判断もあって、天保七年七月江戸で内密に取調べられます。十一日に寺社奉行井上河内守の屋敷で、八右衛門は「唐物抜け荷なら、薩摩藩が毎年七、八艘に唐物を積み新潟の廻船問屋三右衛門へ着船し、新地の竹松が会津で密売している」と供述します。捜査を担当する寺社奉行、勘定奉行、江戸町奉行らは十三日に老中大久保加賀守へ報告します。老中は、唐物抜け荷は竹嶋とは別件で、本来御勝手方勘定奉行の担当だが、ただちに対処するべきだとし、薩摩船入港時の現行犯逮捕を待たずに、江戸町奉行筒井伊賀守に三右衛門、竹松の召捕りを命じます。

八月十二日、筒井らから老中に結果が報告されます。筒井の同心たちが新潟へ行くと、廻船問屋三右衛門という者はおらず、竹松は病死していました。同心たちは探索を続け、新潟で情報を得たのでしよう、若狭屋市兵衛ほか五人を召捕って江戸へ連れて帰ります。

以上が「天保撰要類集」から判明することです。この後、市兵衛らが村松浜の難船事件を自供し、関係者がさらに逮捕されたようです。

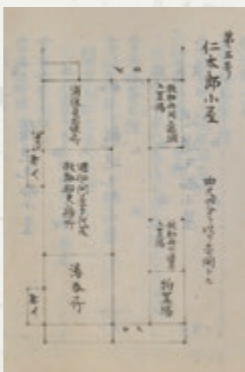
収藏品紹介

「仁太郎小屋」図(新潟区共有物)目録帳より

明治十一年(一八七八)の「郡区町村編制法」に基づき新潟県でも翌十二年四月に郡区町村の区画が決められました。そしてこれまで新潟町であった場所は新潟区になりました。当館ではこの区の共有物を記録した目録帳を所蔵しています。

この目録は「第一号 遥拝所及公園」以下、「第二号 号砲場」「第三号 仁太郎小屋」「第四号 区会議場物品」「第五号 火葬場及休息所」「第六号 区内共有長屋」を記録したもので、図はこのうち「第三号」に添えられていました。信濃川の河口はたいへん浅く、このため出入港する船は座礁しないように水先案内人の手を借りていましたが、江戸時代からこの役割を担ってきたのが「水戸教」の伊藤仁太郎でした。この仁太郎小屋は新潟港を描いた錦絵や当時の廻船問屋の引札の一部にもよく描かれており、あるいは「新潟港らしさ」を演出する象徴的な図柄の一つであったのかもしれません。

また、この小屋については写真も残っていますが、内部の様子はあまり知られていません。さて、目録によれば小屋は明治



「仁太郎小屋」図

十三年に再建されたもので「平屋造 杉皮葺石家根」という仕様だったようです。また目録には小屋の付属施設として「強進丸舟小屋」が「船見町脇砂浜」に、「魁進丸舟小屋」「迅速丸舟小屋」が「海辺町脇砂浜」にあったことが記されています。こうした船は水先案内のほか難船救助にもあたったと考えられます。この点、図からも「救助舟小道具入置場」といったスペースが設けられていたことがわかります。さらに「廻船問屋手代及救助船夫結(詰か)所」や、共有スペースでしょうか「湯呑所」もみられます。

港口を望んで、みんなでのような茶飲み話をしていたのでしょか。

(安宅 俊介 学芸員)